

## ●原 著

## 呼吸器内科医師の海外留学に関するアンケート調査

小林 信明<sup>a,b</sup> 高橋浩一郎<sup>a,c</sup> 浅井 一久<sup>a,d</sup> 磯部 威<sup>a,e</sup>  
 今泉 和良<sup>a,f</sup> 大平 徹郎<sup>a,g</sup> 長内 忍<sup>a,h</sup> 川山 智隆<sup>a,i</sup>  
 國近 尚美<sup>a,j</sup> 小林 和幸<sup>a,k</sup> 佐野 博幸<sup>a,l</sup> 多賀谷悦子<sup>a,m</sup>  
 千葉 弘文<sup>a,n</sup> 橋本 直純<sup>a,o</sup> 須田 隆文<sup>a,p</sup> 金子 猛<sup>a,b</sup>

要旨：呼吸器内科医師の海外留学についてアンケート調査を行い、全国の海外留学経験者75人より回答を得た。回答者の大部分は男性で、留学先は80%が人脈を介しての紹介であった。留学時の卒業年数の中央値は10年、留学期間の中央値は2年であり、91%が基礎研究を目的としていた。留学中は言語や金銭面での苦労を挙げる回答が多かったが、留学の経験はその後の研究(87%)、臨床(63%)に生かされたとする回答が多く、留学の満足度は高かった。本学会に対して、海外留学に対する助成金の拡充や留学先の紹介・斡旋を期待する声が多かった。

キーワード：海外留学, 呼吸器内科医師, アンケート調査

Studying abroad, Pulmonologist, Questionnaire-based survey

## 緒 言

海外留学は医師のキャリアパスにおいて、先進の医学研究に触れるだけでなく、人脈形成、語学習得と多くのメリットがある。一方で、臨床研修必修化の導入や専門

医制度改革により大学院への進学率低下や大学院入学時の高齢化、国際情勢の変化などから海外留学を目指す医師の減少が危惧されている。会員の診療および研究レベルの維持、向上を使命とする本学会において、海外留学をする会員を増やすことは学会の目指すべき方向性と合致する。そこで日本呼吸器学会将来計画委員会では、会員の海外留学の実態を明らかにし、キャリアパスにおける意義や留学に関する問題点を共有すること、海外留学を目指す会員をサポートするための提言作成の資料とすることを目的として、海外留学に関する全国アンケート調査を施行した。なお、本学会は、呼吸器内科、呼吸器外科、病理科、放射線科、基礎系などさまざまな分野の専門家により構成され、それぞれ異なった背景、経緯、目的で海外留学していると考えられるが、今回の調査では会員数の多い呼吸器内科医師を対象にアンケートへの回答を依頼した。

## 研究対象, 方法

全国の医学部を有する大学80施設の呼吸器内科を担当する医局に海外留学に関するアンケートを送付、留学経験者に回答を依頼した。一施設あたりの回答者数には制限を設けなかった。アンケートはGoogle Formsを用い、留学準備から留学中、帰国後の状況などについての質問を行った(表1)。2019年11月末の時点での状況として調査を行った。

<sup>a</sup> 日本呼吸器学会将来計画委員会

連絡先：小林 信明

〒236-0004 神奈川県横浜市金沢区福浦3-9<sup>b</sup>

<sup>b</sup> 横浜市立大学大学院医学研究科呼吸器病学

<sup>c</sup> 佐賀大学医学部附属病院呼吸器内科

<sup>d</sup> 大阪市立大学大学院医学研究科呼吸器内科学

<sup>e</sup> 島根大学医学部内科学講座呼吸器・臨床腫瘍学

<sup>f</sup> 藤田医科大学医学部呼吸器内科学 I

<sup>g</sup> 国立病院機構西新潟中央病院呼吸器センター内科

<sup>h</sup> 旭川医科大学内科学講座循環・呼吸・神経病態内科学分野

<sup>i</sup> 久留米大学医学部内科学講座呼吸器・神経・膠原病内科部門

<sup>j</sup> 山口赤十字病院内科

<sup>k</sup> 神戸大学医学部附属病院呼吸器内科

<sup>l</sup> 近畿大学病院呼吸器・アレルギー内科

<sup>m</sup> 東京女子医科大学呼吸器内科学講座

<sup>n</sup> 札幌医科大学医学部呼吸器・アレルギー内科学講座

<sup>o</sup> 名古屋大学大学院医学系研究科呼吸器内科学

<sup>p</sup> 浜松医科大学医学部附属病院第二内科

(E-mail: nkobayas@yokohama-cu.ac.jp)

(Received 2 Oct 2020/Accepted 24 Nov 2020)

表1 海外留学に関するアンケートで調査した質問一覧

質問	質問内容
1	医師免許取得後経験年数
2	性別
3	アンケート回答時の勤務先
4	留学の目的（基礎研究か臨床研究）
5	留学先
6	卒後何年目で留学したか（留学時の卒後年数）
7	留学期間
8	どのように留学先を見つけたか
9	留学期間中の給与額（平均年額，当時のレートの概算）
10	留学期間中の給与の支給元
11	留学時の同伴者について（留学開始時）
12	帰国後の状況
13	留学経験が研究に反映されているか
14	留学経験が臨床に反映されているか
15	留学の満足度
16	留学した感想
17	留学で苦労したこと
18	海外留学に関して日本呼吸器学会に期待すること

## 結 果

### 1. 回答者について

全国35施設に所属する，75人の医師から回答が得られた。回答者について，回答時の医師免許取得後経験年数（質問1）は中央値20年（11～37年）で，20～24年目が21人，15～19年目が19人の順で多かった（図1）。回答者の性別（質問2）は70人（93%）が男性であり，女性は4人（5%），1人が不明であった。また，回答時の勤務先（質問3）は73人（97%）が大学病院であった。

### 2. 留学について

留学の目的（質問4）は基礎研究が68人（91%）であ

り，臨床研究（医療行為を伴わない）は7人（9%）と，大部分の留学が基礎研究を目的としたものであった。国別の留学先（質問5）は，米国が50人（67%），ついでカナダ12人（16%），英国3人（4%），フィンランド2人（3%）であった。留学時の卒後年数（質問6）の中央値は10年（4～17年）で，医師免許取得後10年前後で留学するケースが多かった（図2）。留学期間（質問7）の中央値は2年で，2年以上3年未満が40人，3年以上4年未満が16人と，2～3年が大半を占めていた（図3）。また，留学先をどのようにして決定したかの質問（質問8）については，所属の医局からの紹介44人（59%），医局以外の人脈による紹介19人（25%），公募12人（16%）であった。留学中の年収（質問9）の中央値は400万円（0～700万円）であったが，図4に示すようにばらつきが大きかった。留学中の給与の支給元（質問10，重複回答可能）は，留学先より支給（59人），留学助成金（17人）の順で多かった（図5）。留学開始時の同伴者について（質問11）は，配偶者と子供とともに留学したケースが最も多く46人（61%），単身14人（19%），配偶者と一緒が14人（19%）であった（図6）。

### 3. 留学後について

留学後の所属に関する質問（質問12）では，留学後の所属が留学前と同じが57人（76%）と多く，留学前と異なる大学や研究所が11人（15%）だった。留学経験の効果について，留学の経験が研究に生かされているかについて（質問13，二項選択回答形式）は，65人（87%）が研究に生かされていると回答し，臨床について（質問14，二項選択回答形式）は47人（63%）が留学の経験が臨床に生かされているとの回答であった。留学の満足度に関する質問（質問15）では，中央値80点（30～100点）と

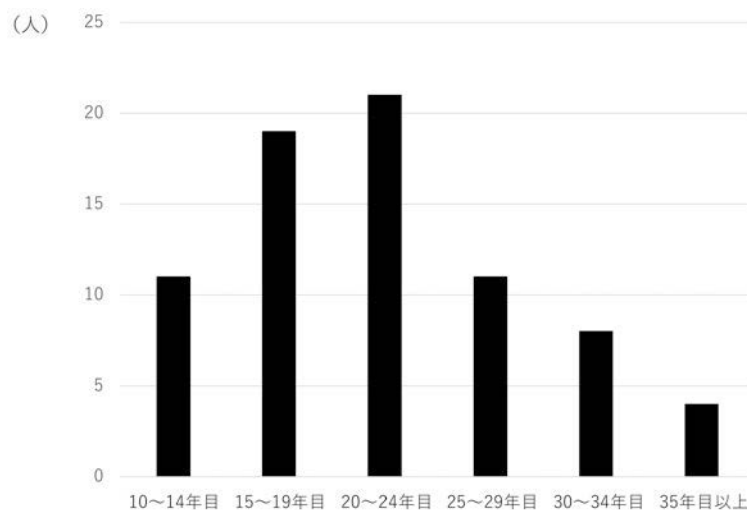


図1 回答時の医師免許取得後経験年数。

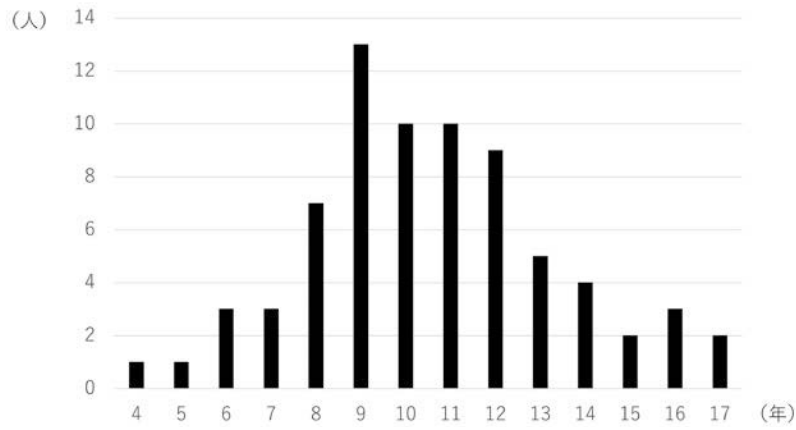


図2 留学時の卒後年数.

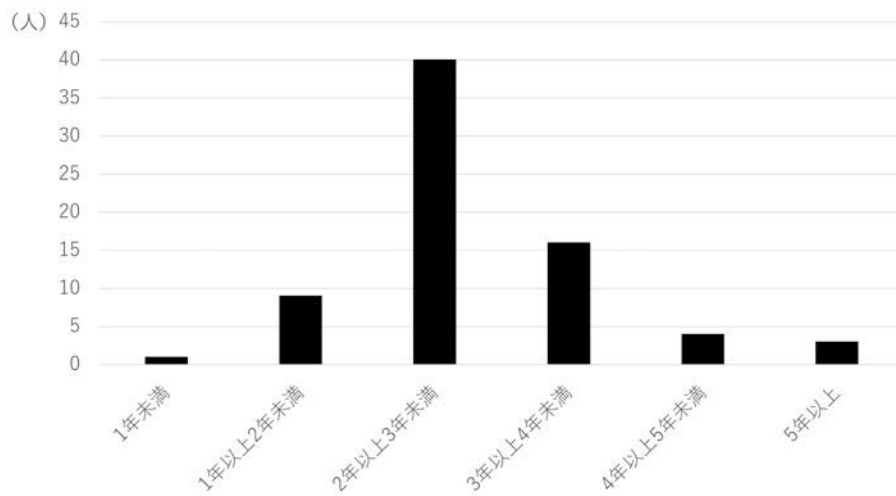


図3 留学期間.

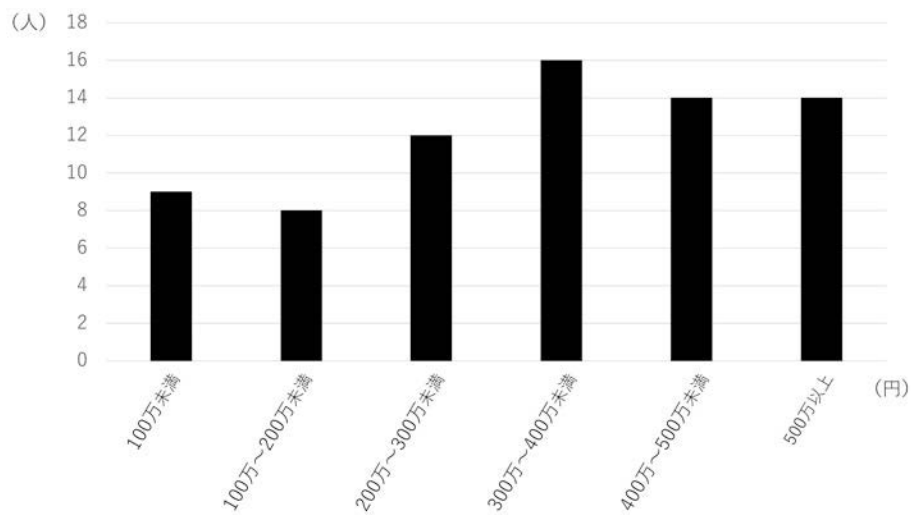


図4 留学中の年収.

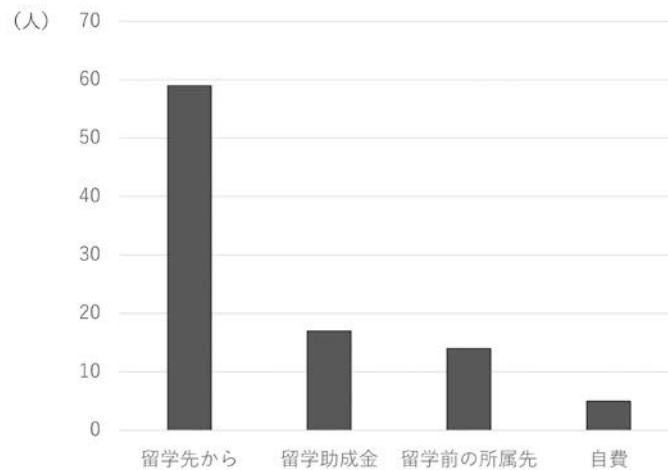


図5 留学中の給与の支給元.

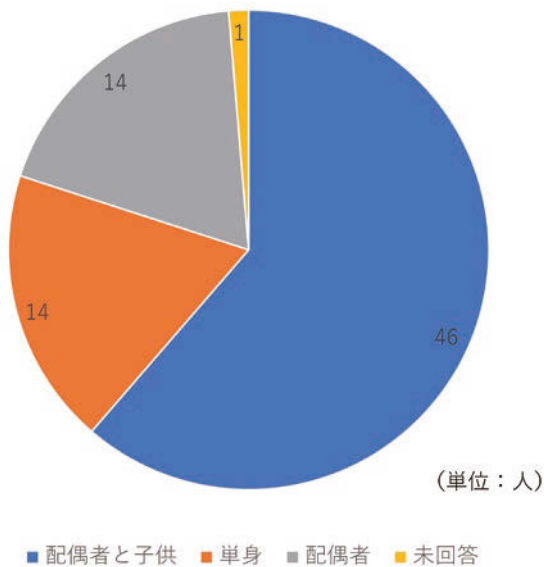


図6 留学の同伴者.

多くの回答者が留学に満足していた (図7)。留学の感想 (質問16, 自由記載) では、留学のメリットとして異文化体験ができたこと (33人, 44%), 研究面で恵まれていたこと (研究の先進性, 研究環境, 豊富なグラント, 臨床を離れて専念できるなど) を挙げた回答者が24人 (32%), 幅広い人脈形成ができた (7人, 9%) の順で多かった。また、留学期間中に苦労したこと (質問17, 自由記載) では、言語の問題 (33人, 44%), 金銭面での問題 (21人, 28%), 文化・生活の違い (14人, 19%) を挙げる者が多かったが、研究面での苦労 (7人, 9%) は少なかった。最後に、海外留学に関する本学会への期待 (質問18, 自由記載) では、半数近くが助成金や奨学金の拡充 (34人, 45%), 留学先の紹介・斡旋 (33人, 44%) を望んでいた。

## 考 察

今回、本学会で初めて、海外留学を経験した会員を対象に留学に関するアンケートを行った。アンケートにご協力いただいた回答者の多くは、医師免許取得後経験年数 (図1)、現在の所属から、大学で指導的な立場にあることが推察された。また、ほとんどが男性であり、女性医師の海外留学は大きな課題であると考えられた。

研究の目的は基礎研究が大半であり、留学時の卒業年数の中央値が10年であった。今回の調査では、大学院の研究内容は含まれていないが、大学院で基礎研究を経験しその後数年以内に留学を経験するケースが多いと推察された (図2)。留学先の決定に際しては、所属医局からの紹介は59%と大学医局を中心としたアンケートとしては少ないものの、医局以外の人脈を利用した紹介を合わせると8割が縁故を介したものであり、留学先の選定における人脈の重要性が浮き彫りとなった。

留学中の収入についてはばらつきが大きく一定の傾向は認めなかったが、留学中の年収の中央値は400万円 (0~700万円) であった (図4)。その給与は留学先から支給されていることが多かった (図5) が、配偶者および子供を伴ったケースが多いこと (図6) を加味すると、生活費に関する不安の低減は留学者を増やすための課題と考えられた。

留学した感想に関する質問では、言語や金銭面で苦労するケースが多いものの、研究に専念できるだけでなく、異文化に触れる良い機会であり、その後の人生に大きく役立つ人脈形成ができたとする回答が多く、留学は研究面においても臨床面においても有意義とする回答が大半であり、総じて留学に対する満足度も高かった (図7)。また、多くの回答者が配偶者または配偶者と子供といった

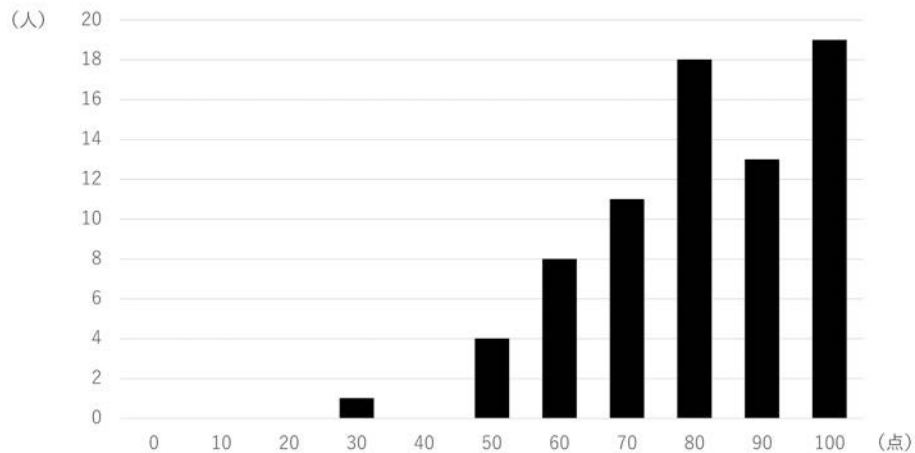


図7 留学の満足度.

家族で留学しており、家族と一緒に過ごす時間が多く取れたことから、プライベートの充実も海外留学の魅力と考えられた。本学会に対しては、助成金の拡充などによる金銭面での援助と留学先の紹介や斡旋などに期待する声が大きかった。助成金に関して本学会は、日本呼吸器学会海外留学助成金により、1人につき年間200万円を助成する制度を設けている。他学会では日本循環器学会は年間300万円、日本アレルギー学会では年間100万円の助成制度がある。いずれも年間数名の助成にとどまっております。助成金が質、量ともに拡充されることが期待される。

本アンケートのlimitationとして、対象を呼吸器内科医師に限ったこと、回答数が少なかったこと、留学から帰国後間もない医師からの回答が少なく最近の状況が反映されていない可能性があること、大学医局を離れた医師や、大学以外の関連施設に在籍する医師からの回答がほとんど得られなかったこと、などがある。結果の解釈にはこれらに注意が必要であると考えられるが、実際の留学経験者の体験に基づいた意見であり、今後、留学を志

向する本学会員、およびその海外留学を促進したい本学会にとって参考にすべき点が多いものと思われる。

## 結 論

留学を経験した呼吸器内科医師に対するアンケートを行った。留学先の選定や生活費の工面などの課題はあるものの、海外留学の満足度は高く、多くの留学経験者がその後のキャリアに役立ったと感じていることが明らかとなった。海外留学を促進するために本学会に寄せられている期待は大きい。

謝辞：本アンケートの回答にご協力をいただきました先生方、web上でのアンケートの作成、およびデータ収集にご尽力いただきました、日本呼吸器学会事務局 松宮美紀様および安藤祐加様に、心より感謝いたします。

著者のCOI (conflicts of interest) 開示：本論文発表内容に関して申告なし。

## Abstract

## Questionnaire-based survey on studying abroad among pulmonologists in Japan

Nobuaki Kobayashi<sup>a,b</sup>, Koichiro Takahashi<sup>a,c</sup>, Kazuhisa Asai<sup>a,d</sup>, Takeshi Isobe<sup>a,e</sup>, Kazuyoshi Imaizumi<sup>a,f</sup>, Tetsuro Ohdaira<sup>a,g</sup>, Shinobu Osanai<sup>a,h</sup>, Tomotaka Kawayama<sup>a,i</sup>, Naomi Kunichika<sup>a,j</sup>, Kazuyuki Kobayashi<sup>a,k</sup>, Hiroyuki Sano<sup>a,l</sup>, Etsuko Tagaya<sup>a,m</sup>, Hirofumi Chiba<sup>a,n</sup>, Naozumi Hashimoto<sup>a,o</sup>, Takafumi Suda<sup>a,p</sup> and Takeshi Kaneko<sup>a,b</sup>

<sup>a</sup>The Planning Committee of the Japanese Respiratory Society

<sup>b</sup>Department of Pulmonology, Yokohama City University Graduate School of Medicine

<sup>c</sup>Division of Hematology, Respiratory Medicine and Oncology, Department of Internal Medicine, Faculty of Medicine, Saga University

<sup>d</sup>Department of Respiratory Medicine, Graduate School of Medicine, Osaka City University

<sup>e</sup>Department of Internal Medicine, Division of Medical Oncology and Respiratory Medicine, Shimane University Faculty of Medicine

<sup>f</sup>Department of Respiratory Medicine, Fujita Health University School of Medicine

<sup>g</sup>Department of Respiratory Medicine, National Hospital Organization NishiNiigata Chuo Hospital

<sup>h</sup>Cardiovascular, Respiratory and Neurology Division, Department of Internal Medicine, Asahikawa Medical University

<sup>i</sup>Division of Respiriology, Neurology, and Rheumatology, Department of Medicine, Kurume University School of Medicine

<sup>j</sup>Department of Internal Medicine, Japanese Red Cross Yamaguchi Hospital

<sup>k</sup>Division of Respiratory Medicine, Department of Internal Medicine, Kobe University Graduate School of Medicine

<sup>l</sup>Department of Respiratory Medicine and Allergology, Kindai University Hospital

<sup>m</sup>First Department of Medicine, Tokyo Women's Medical University

<sup>n</sup>Department of Respiratory Medicine and Allergology, Sapporo Medical University School of Medicine

<sup>o</sup>Department of Respiratory Medicine, Nagoya University Graduate School of Medicine

<sup>p</sup>Second Division, Department of Internal Medicine, Hamamatsu University School of Medicine

A questionnaire-based survey was conducted to gain a greater understanding of the experience of studying abroad among pulmonologists in Japan. Questionnaires were distributed within the respiratory medicine divisions at medical universities in Japan, and responses were obtained from 75 people who had studied abroad. Most respondents were males with more than 15 years of experience as a medical doctor. Most overseas destinations were selected through connections with the medical university the doctor belonged to or other personal connections. The median years of experience as a doctor at the beginning of the study abroad was 10 years, and the median duration of study was 2 years. Most respondents went abroad to undertake basic research. Although many of them experienced language-related and financial difficulties while studying abroad, they realized its value in both research (87%) and clinical practice (63%). Many respondents expressed the hope that the Japanese Respiratory Society will increase its grants for studying abroad and assist in making arrangements at the overseas destination.